

(上) 鉛筆はBを愛用。書道も師範級の武知さん。原稿は流れるような美しい文字で。
(下) カンプを前に、次回作の打ち合わせ中。「桜の木の下に眠ってる愛猫マイの物語を。マイを通じて、隣人の心の豊かさや切なさにもふれることができました。供養にもなる筆を持つのですが、数々の思い出が去来して涙ばかり……なかなか進みません。」

「ハンデ」なんてない。 病気を重ねたから書けた『私のこころの物語』

夫を送るまでの介護生活は3年続き、以前手術した「脊柱管狭窄症」が悪化、武知さんは2度目の手術をしました。

「私はどうも難病に縁があつて。40代で脊髄に風邪の菌が入り「ギラン・バレー症候群」を発症したことも。東京の大田病院に半年入院して、一命はとりとめました。私の脊髄にはポルトやプレートがいつぱい入っているの。」

「膝関節症」の治療中に膝に菌が入り化膿して緊急手術、生死をさまよったことも。その後も大腿骨骨折で入院。

そんな体験が『私のこころの物語』を書くことに繋がります。世間や日常と隔離されている入院生活は、お話を創作するには絶好の環境でした。

——私もこの原稿を病院のサイドテーブルで書きました。決して負けません。

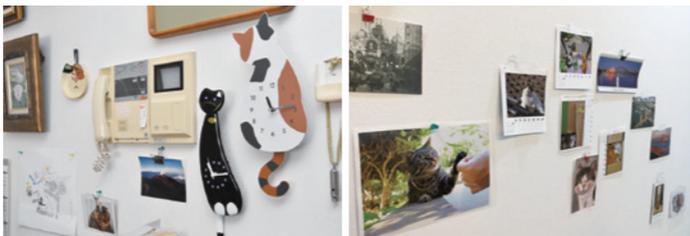
いまも車いすですけど、春の光を待っています。川崎から私の思いを、エールを送ります。 すみ ゆかこ——

こんな思いを込めた「あとがき」が、病と闘う子どもたちを励まします。

度重なる入院生活で衰えた足の筋肉を鍛えるため、週に2回のリハビリで体を動かすことを心がけ、マッサージも欠かしません。シルバーカー（歩行を補助する手押し車）で外出ができることまで回復したら、今度は坐骨神経痛の痛みで、夜も寝られない日々。

人生の後半に車イス生活を余儀なくされても、家族や友人のサポートを得て、海外旅行にも挑戦しました。

「すみません。ありがとう。」涼やかな声で今日も颯爽と街を行きます。



気に入ったネコの写真や絵がどうしても捨てられず、壁がギョラリに。

小森 由美子：写真家

東京工芸大学（旧写真大学）卒業。〈時事画報社〉専属カメラマンとして勤続の後、フリーランスとして活動。マタニティ&ベビー・フォト・スタジオ〈Curuton クルトン〉代表。2010年「写ガール展」（日本芸術出版社）入賞など。2013年から、日本一人口の少ない町・山梨県南巨摩郡早川町に山村留学中。2015年10月、築200年超と歴史ある入母屋式かぶと造りの家屋を、古民家カフェとしてリニューアルオープンした〈鍵屋〉ゼネラル・マネージャーも務める。

▼鍵屋/〒409-2701 山梨県南巨摩郡早川町奈良田 1064-43 TEL:0556-20-5556
HP: <https://cafe-kagiya.com/>



在宅ケアサービス、在宅介護の先進国でもあるフィンランドの首都・ヘルシンキにて。移動は全て、トロリーバスや鉄道の公共交通機関を利用。